数独試験 99歳挑む

大槌・大下さん最高齢

初の実施、108人が受験

数字を使ったパズル「数独」の技能認定試験（日本数独協会主催）は9日、全国で初めて大槌町小鎚の町中央公民館で行われた。受験者108人の最高齢は99歳の大下きよさん（同町吉里々々）。東日本大震災の津波で自宅を失い、生活の励みとして取り組んできた成果を発揮しようと、張り切って難問に向き合った。

全国初の数独技能認定試験に挑む大下きよさん（手前）

数独は縦横各3升、計9升に1から9までの数字を重複せずに入れる数字パズルで、難易度が上がるに連れ、升にあらかじめ記入されている数字が少なくなるのが特徴。全国から集まった小学1年生を含む108人は静寂に包まれた会場で、時折首をかしげながら黙々と鉛筆を走らせた。

大下さんは被災当初、多くの若者が犠牲になった町の現状を憂い「何で自分みたいな年寄りが生き残ってしまったんだ」と嘆く日々が続いた。だが、2012年1月に同町吉里々々の高齢者施設ぬくっこサポートセンターに入所してから少しずつ変化。持ち前の向上心でゲームや数独に挑むようになり、気持ちに張り合いが生まれた。今回の試験までの1カ月間は、ほかの入所者約20人と一緒に毎日模擬試験に取り組んだ。

同町では震災後、東京都のNPO法人ソーシャルハーツ（川上誠代表理事）が数独教室を開催して以降、高齢者を中心に人気を集めており「自分のレベルを知りたい」との要望に応えようと、川上さん(63)が同町での技能認定試験実施に尽力した。川上さんは「大下さんはこつこつと自分のペースで努力を続けている。年齢を重ねてもチャレンジする姿勢は素晴らしい」とたたえる。

試験は正解数に応じて7～11級を認定。認定証は今月中に送付され、同町在住の受験者には川上さんが直接認定証を授与する。

おかえり「おはなし会」

市立図書館 本設初の読み聞かせ

陸前高田

陸前高田市高田町のかさ上げした中心市街地に7月に開館した市立図書館（戸羽良一館長）は9日、開館後初のおはなし会を開いた。震災後は狭い仮設施設だったため開催できずにいた。久々の恒例イベントに協力したボランティアグループや子どもたちに笑みが広がった。

同市のボランティア団体おはなしペパン（馬場幸子代表）が協力。親子ら約20人に「つきよのかいじゅう」「まちにはいろんなかおがいて」など5冊を読み聞かせて紹介した。

子どもたちは耳を澄ませ絵本に集中。大船渡市赤崎町の菅野千佳ちゃん(5)は「図書館に来たのは2回目。面白い絵本があって好き」と楽しんでいた。

本設図書館で初めて開催したおはなし会で、絵本に見入る子どもたち

同団体は震災前、約20年にわたり図書館で「ペパンおはなし会」を開催。震災後は保育園や小学校に出向いて活動していた。

馬場代表は「ゼロからのスタートだが再開できてうれしい。開放的で良い図書館ができたので、今後も工夫を凝らしながら定着させたい」と意欲を語った。

救急の現場体感

防災センターで消防フェア

大船渡

大船渡消防署（大久保守正署長）などは「救急の日」の9日、大船渡市盛町の市防災センターで「消防フェア」を開いた。参加者は今年完成した同センターの施設見学や心肺蘇生法の講習会などを通じ、救急業務に対する知識を広げた。

心肺蘇生法・自動体外式除細動器（AED）使用法講習会には約30人が参加。救急救命士らの手ほどきを受けながら人形を使って胸骨圧迫と人工呼吸を体験した。立根小4年小山陽渚莉（ひなり）さんは「30回胸骨圧迫をするのが大変だった。実際にこういう場面に出くわしたときもできるようにしたい」と真剣な表情を見せた。

フェアは昨年まで県立大船渡病院で開催していたが、同センターが完成したため移転。例年より規模を拡大し、技術訓練の見学や煙体験なども行った。

人形を使い心肺蘇生を体験する参加者

癒やしの時間 住民共有

花植え、ハンドマッサージ体験

SMILE TOHOKU PROJECT

釜石

スマイルとうほくプロジェクト（岩手日報社、河北新報社、福島民報社主催）の花植え、手洗い、ハンドマッサージの体験会は9日、釜石市の天神復興公営住宅で開かれ、住民らが和やかな時間を過ごした。

住民とかまいしこども園の園児ら約30人が参加。プランターにマリーゴールドとベゴニアの苗を植えた後、プロジェクトに賛する花王（東京都）の指導の下、正しいを実践。指の間や手々まで洗って汚れし、マッサージで疲やした。見さん(78)はもたちと花られて楽た。手洗いはさっと流が多いが、洗うととて

まつり成功願 草刈り奉仕に

JTBグルー

大槌

JTBイアリング（東京都文京区美文社長）は9日、つりの会場となる大鎚の小鎚川河川敷を掃奉仕活動を行い、らスタートするまつ功を願った。

本社と北海道、東店から社員約100加し、地元住民らと械を使って草刈り

草刈り作業に励む参加者

た。青空の下、高く草の処理や斜面での苦戦しながら、声をい、心地よい汗を流

活動は2011年まり7年目。震災前町を訪れるツアーを ていた縁などで大 (58)が発案した。被ルの清掃などに取り 3年前から大槌まつ わせて草刈り作業を る。

宮城県登米市出身 国内旅行部の佐々木 ん(27)は「東北へのだと思い作業した。の参加となるが、興を感じられるい だ」と充実感をにじ